

## 農作業体験を通じての総合的な学習に関する一考察

### A study about Period for Integrated Studies through experience learning of agriculture

山 本 一 生      千 葉 直 紀  
YAMAMOTO Issei    CHIBA Naoki

キーワード：農作業体験、総合的な学習、主体性の喚起

#### はじめに

本稿では、2018年度より上田女子短期大学幼児教育学科の千葉直紀と総合文化学科の山本一生の各ゼミナール（以下「千葉ゼミ」「山本ゼミ」と略称し、カッコを用いない）で行っている農作業体験についての実践報告を行う。実習園は、上田市在住の農家、工藤賢太郎氏のご厚意で個人的にお借りしている。

農作業体験のねらいは、農業技術を習得することだけではない。むしろ、農家との連絡から始まり、各ゼミでの役割分担を行うといった関係性作りに重点を置いている。さらには植物の育成を通じての道徳性の涵養、地域とのつながり、農業従事者の子弟が学生として農家の知恵を家庭内で探るといった、総合的な学びとなることをねらいとしている。

以下では、両ゼミの取り組みとそのねらいについて実践報告を行い、課題点を抽出する。

（山本一生）

#### 第1章 千葉ゼミ

##### 第1節 農作業体験のねらい ～マニュアル外の経験を～

昨今の学生との関わりを振り返ると、指示をしたことは非常に丁寧にこなすことが出来るが、自ら考えて行動することや先を予測して行動することが難しいという姿を目にする。このことは宇根豊も、科学技術の発達とその技術を使いこなすためのマニュアルが整備され、体験しなくても実施できるような世の中に対する批判を示した上で、「マニュアルに書いていないことへの対応ができなくなっています」<sup>1</sup>と指摘している。本学科は幼児教育学科であるため、卒業後幼児教育を中心とした専門職に就く学生が多い。幼児教育の現場において子どもと過ごす時

間は、まさにマニュアルのない出来事の連続である。そのような中で保育を進めていこうとした時、指示されたことだけを行ったり、自ら考える事もなしに行動したりすることは職業を継続していく上でも困難が生じることが予想される。本来幼少期からマニュアル以外のことを積み重ねて人生を歩み、うまくいったりうまくいかなかったりする経験をしてくれているはずであるが、どうもそうではない学生が増えてきている。その事態を少しでも良い方向に導く材料として考えたことが実体験である。

実体験といっても何を体験するか、悩んだ末にたどり着いたのが農作業体験である。2018年度は、学生と共に手探りでさつまいもの栽培と収穫を行った。その工程の中で筆者自身が体験した草刈りや水やり等の大変さと充実感があった。そのことがきっかけで2019年度の学生に対しても実践することを決めた。川崎道夫も畑や植樹のために幼稚園の園庭を掘り起こす作業を学生や園の子どもたちと共に行った状況を振り返った上で、「そんな感覚の集積が、達成感と共感で彩られる。そうした自然の対象世界と格闘することの喜びが、生きること、大きくなることへの楽天的信頼感を育むのである」<sup>2</sup>としている。また、加用文男は「人は、自然に対して鑑賞的に関わるだけでなく、我々自身が自然の一部であり、それ自体を自らのうちにも持ち（一体感）、生活の場あるいは糧として生きる、自然は農耕の対象でもあります」<sup>3</sup>とも述べており、農耕と自然と人間との関わりに関して問うている。このように筆者自身が自ら畑で得た自然と混じりあう感覚、一体となる感覚を学生たちにも味わってもらいたい、体験してもらいたい、そう考え実践を行うことにした。加えていえば、本短大の地域は年間を通して降雨の少ない土地である。その土地で農耕を行い、生きてきた先人の文化というものも同時に体験して思いを巡らせて欲しいと願っている。

さらに、千葉ゼミは人と共に生きることを大切にしたいゼミ運営を行っている。ただ単に、農作業体験をして収穫することが目的ではない。農作業体験という1つのテーマを通して学生同士がお互いを頼りにし、伝えあい、役割を分担し合う。本学科は保育士資格と幼稚園免許を2つ同時に取得する学生が多い。短大生が2年間の中で保育士資格と幼稚園免許を2つ同時に取得するという事は、非常に過密なスケジュールとなる。その学業や実習がある中での継続した農作業体験となるため、役割の分担や学生同士、又は学生と教員のやり取りが非常に重要になってくる。社会に出る前に少しでもそのような経験をし、主体として行動することに喜びを感じられるようになって欲しいと願っている。

## 第2節 農作業体験までの工程

千葉ゼミ（2年生前期）においては次の事柄から自身で選択し、課題を達成することが前期中の目標となる。それらが、次の「農作業体験」、「レポート課題」、「実習報告」の3つである。その3つの課題から1つ～3つ選び、自分で選択したものを前期中に行うという形で取り組んだ。ゼミ生の中には1つを選択した学生、2つを選択した学生、3つを選択した学生と様々であったが、全員が「農作業体験」を選択した。

ゼミ運営においては、自らの課題と照らし合わせながら自分で選択して行うことで主体的な

活動となるように配慮した。「農作業体験」においては、実体験や役割分担、耕す・植える・水やり・草刈り・収穫といった実践という目的である。「レポート課題」においては文章力の向上と卒業論文への材料抽出の目的である。「実習報告」においては、現場で経験した子どもとの関わり等の実践を口頭発表し、実践を捉える力と発表力の向上を目指してこのような設定を行った。このような中で「農作業体験」は全員が取り組むこととなった。

### 第3節 役割分担

「農作業体験」の実践に際しては、ゼミ担任が選んだ学生3名が畑長（畑長1名、副畑長2名）を担当し、他の学生をまとめるよう枠組みを構成した。考えなければならない活動（苗の買い出し、畑を見に行く頻度、草が伸びてくる時期など）を提示し、あとは畑長を中心にゼミの時間等を使って学生同士が打ち合わせを行うなど、自分たちで進めることができるように働きかけた。

「農作業体験」へ向けた準備も学生が中心となり、空き時間や放課後に苗を買いに行った。この苗を買うという作業は簡単な作業ではあるが、自分たちで選んだものを植えるため大切な作業となった。実際にゼミ生も苗を買った後、保管している研究室を訪れ様子を確認する姿も見られた。2019年4月24日（水）ゼミの時間に畑を耕し、5月29日（水）ゼミの時間に苗を植えた。収穫した野菜で何を作るのか。それと関連して植える作物を何にするか。水やりをどうするか。いつなら畑に行けるのか。といった1つひとつを全員で確認しながら行った。苗を植える当日はキュウリ等の支柱（これも農家より竹を頂き、学生がなたで枝を削ぎ落とし、支柱を作った）や種まきなど役割を分担して作業を行った。服装など詳細の連絡は教員からはしなかった。しかし畑の作業ということで、全員がジャージ等汚れても良い恰好をしてくるなど、畑長を中心に学生それぞれが考えて行動していた。また、水やりに関して雨の予報などを確認しながら必要に応じて水やりを行った（今年は降雨が多く、水やりが少なくて済んだ）。

6月12日（水）ゼミの時間に草刈りを行う。しかし、幼児教育学科は学生が輪番的に2週間の教育実習に行くため、畑長が不在になったり、人数が揃わなかったりすることもあり、この日も草刈りは5名で行うなど進めて行く上での難しさもあった。さらに7月10日（水）ゼミの時間においても畑に行き、草刈りを行った（図1）。草刈りは機械などを使わず、自身の手と鎌のみを用いて行った。これは、自然との一体感や草の持つ生命力を、自分の身体を通して感じて欲しかったからである。夏の時期が近づくにつれて草が非常に多くなり、草刈り作業だけでも大変な労力となる。学生は畑長を中心に行動してくれてはいたが、苗植え・水やり・草刈りと自然を相手にしているだけに、雨が降るたびに草が伸び、まさにマニュアルにない行動が求められる形となった。7月10日（水）における草刈り作業は、草の間を跳ぶカエルに身を固める学生や虫が怖くて草に近づく事すらできずにいる学生、黙々と草を刈る学生など様々ではあったが、同じ作業をする中で秋に行われる学園祭の構想をゼミ長が中心となり話しながら行うなど一緒に行っているからこそその充実感が感じられた。

前期試験が終了した7月25日（木）ゼミ生数名と畑に行き、トマトとナスを収穫した（図2）。

数個の収穫ではあったがゼミ生同士で分け合いながら持ち帰ることができた。しかし、他の収穫物（じゃがいも・にんじんなど）は前期中に収穫に至らず、収穫を全員が体験するまでには至らなかった。

図1 7月10日草刈り



図2 収穫物 ナス



#### 第4節 「農作業体験」で得た経験と反省・考察

今回は「農作業体験」を通して1つの物事を学生に任せる形で進めた。全員で取り組むことで学生同士の対話が生まれたり、学生同士だけではなくゼミ担任に相談に来るなどコミュニケーションの機会が増えたりしたことは非常に良い点であった。また、草刈りなどは労力を使うが、1つの畑をお借りし、管理していただくだけでも非常に大変であることを学ぶ機会となった。また、草刈りなどの作業中にゼミ担任とゼミ生が会話をする機会があり、学生の悩みや考えていることを知り、学生を捉え直す機会にもなった。学業を通して見る学生と実体験の場での学生が見せる姿はやはり同じではない。取り組みの中での1つひとつのやり取りや姿を捉えながらゼミを運営していくことの大切さを改めて学ぶ機会となった。

一方で、改善すべき点も多々ある。当初のねらいとしては実体験を大きな目的の1つとして挙げていた。何を作るか、苗はいつ買うかという1つひとつの段取りを経験することは出来た。また、水やりや草刈りも定期的に行うことも出来た。しかし、今回の「農作業体験」においては前期中に収穫に至っていない。計画して世話をし、収穫して食べるというところまで到達してやっと、草刈りの大変さや水やりの大変さが喜びへと変わるはずである。今回はその部分を経験出来ずに前期を終えてしまった。自然との付き合い故にその難しさを痛感することもまた実体験であり、マニュアルにないことではある。しかし、前期を終えるということは試験や実習、夏休みを途中で挟むということであり、学生にとって畑というものの存在比率が低くなって然るべき点でもある。天候等の影響もあるが、学生の意識が継続して向くことができるような段取りを考慮していく必要性を感じた。

また、今回は前期のゼミの活動目標を3つから選択して行うこととしたが、ゼミ担任が「農作業体験」は誰しもが選ぶであろうと仮定して選択肢に入れたものである。しかし、当初のねらいから出発するのであれば「農作業体験」は選択肢から外して全員が取り組むという大前提を作ってから始めた方が良かった。結果としては全員が選択し、取り組んだのだが、次年度につなげたいところである。

最後に、当初のねらいであった筆者自身が草刈りなどで昨年度体験した、自然と一体となる感覚や川崎の述べる「そうした自然の対象世界と格闘することのよろこび」のようなものを得ることが出来たのかということについて振り返りたい。学生がゼミ等の時間を用いて「農作業体験」を経験したことは事実といえる。しかし、「農作業体験」がまだまだ自分事になっていないことにこの取り組みの課題があるのではないだろうか。つまり、自ずから自分のこととして全員が行うことが出来ていない。大田堯が目的意識性と言う切り口から「当の人間がその気にならないかぎり、外から強制的に変えることはできません」<sup>4</sup>と述べているが、今回の取り組みにおいての学生もまだ自分事にはなっていない。さらに、大田は「あれがほしい、これがほしいというのではない、何を求めてよいかわからない。この“めあてのない欲求不満”それがいまこの国の大人と若者の、とりわけ『しらけた』といわれる若者たちの苦悶なのです」<sup>5</sup>と述べている。このことから科学技術が発達した昨今に生きる学生の苦悶ともいえる一側面を「農作業体験」からも捉えることができる。また、「人間の子どもにとっての遊びの特徴は、何かのためでなく、それ自身を楽しむ、その行動自体の中に生きることだと思います」<sup>6</sup>と大田が言うように、目の前の事柄自体を楽しんでいたかということ、その段階までは到達していない。しかし、そこに近づくための第1歩にはなったのではないだろうか。さらに大田は「既成の文化・文明に依存し、それに呑みこまれて、自分の意図を自分の手ごたえをもって実現するめやすを失い、社会生活の中での自分の地位や役割が不分明になっているのです」<sup>7</sup>と述べている。現代の若者の“しらけた”状態が科学技術の進歩からくるものであれば「農作業体験」という実体験がその“不分明”を少しでも解消する体験になりはしないだろうか。「農作業体験」を通して行う体験をもっともっと自分事としていくことが出来るように時期や連続性を考慮し、それ自体を楽しむことが出来るような働きかけを検討していきたい。今回の体験を通して学生が主体として生きていくことの喜びを感じる1つの契機となれば幸いである。

(千葉直紀)

## 注

- <sup>1</sup> 宇根豊「なぜ、農業体験なのか 百姓学から保育学へのメッセージ」(宮里六郎『季刊保育問題研究253』新読書社、2012年)、p. 47。
- <sup>2</sup> 川崎道夫「自然に共同で「対峙」する共同・共感と憧れの人間関係を」(同上誌所収)、p. 12。
- <sup>3</sup> 加用文男「子どもと自然 センス・オブ・ワンダーの意味」(同上誌所収)、p. 140。
- <sup>4</sup> 大田堯『教育とは何か』(岩波書店、1990年)、p. 70。
- <sup>5</sup> 同上書、p. 70。
- <sup>6</sup> 同上書、p. 134。
- <sup>7</sup> 同上書、p. 73。

## 第2章 山本ゼミ

### 第1節 「学校園」と農作業体験

学校内で農作業体験を行うことは、近年に始まったことではない。そこで、以下では農作業体験について歴史的に振り返ってみる。田中千賀子に拠ると、1905年11月に文部省が「学校園施設通牒」を出し、尋常小学校での学校園の設置が全国的に推進された<sup>1</sup>。学校園は、農業実習の場として期待されたのではなく、あくまでも農業への忌避を改善するために「農業の趣味の助長」を図るための施設として設置された<sup>2</sup>。長野県内では1887年に小県郡芳田小学校に創設された「実業園」が「学校園の設置」の始まりだという<sup>3</sup>。その後、学校園と実習地は混同されて展開していくが、大正期に入ると理科などの教科教授用の学校園と、農業実習用の実習地が明確に区別された<sup>4</sup>。

このように、明治期から長野県内では「農業の趣味の助長」を図る「学校園」が設置されていた。本ゼミでの農作業体験は、「学校園」の延長線上に位置付けられると言えよう。とはいえ、当初から学校園の歴史的過程を意識して農作業体験を行っていたわけではない。この活動を歴史的に捉えると、学校園の一つとして捉え返すことができると思われる。

### 第2節 農作業体験のねらい

さて、農作業体験を考える上で、そもそも「体験」とは何か、ごく簡単ではあるが考察する。『大辞泉』（小学館）に拠ると、「体験」は、その人の行為や実地での見聞に限定して、「恐ろしい体験」「体験入学」「戦争体験」のように、それだけ印象に強い事柄について用いることが多い」という。また、「(ドイツ) Erlebnis哲学で、個々の主観のうちに直接的または直観的に見いだされる生き生きとした意識過程や内容。特に生の哲学ではその中心概念をなす。」という。すなわち、「体験」とは、直観的に把握される印象が、既存の観念の変容を促すことである、とまとめられよう。農作業「体験」もまた、そうした営みの一つと言える。

なお、報告者自身が農作業体験を始めて2年目であり、農業技術を書籍や農家から学びつつ、農作業を行っている。そのため、学生だけではなく、報告者自身が「農作業体験」を通じての変容が促されているのである。先に述べたように、本ゼミでの「農作業体験」は農業技術の習得にあるのではなく、作物の栽培を通じて地域の人々や家庭内との関わりを促し、体験者自身が総合的な学びとなることをねらいとしている。この点は、先述のように学校園が「農業の趣味の助長」を図るための施設として設置されたことと重なるだろう。

農作業体験で重視していることは、学生たちに主体的に参加するよう促すことである。むしろ一番の困難はここにあると言える。すなわち、教員がどの程度関わるのか、という関わり方の強弱に困難がある。この困難については、次節の「役割分担」で述べよう。

### 第3節 役割分担

山本2年ゼミでは、前期2回目（4月16日(火)）から畑興しを行った。畝は合計4本作った。鍬を初めて手にし、畝を作るのも初めてという学生がほとんどだった。が、1名は実家での農作業

を手伝った経験があり、畑での適切な服装（麦わら帽子、作業用長靴など）を準備していた。また鍬の使い方にも慣れていた。そこで、彼女を中心に鍬の使い方指導を行い、学生間で相互に指導し合う関係作りを行った。そして全員が鍬を使って畝を作る体験を行った。畑がある塩田平は粘土質の土地のため、鍬に土が付いて重くなる。そのため、鍬をどのくらいの角度で土に当てればよいかといったように、体的に技術を学んでいった。

図 1 山本ゼミの実習園



写真手前に大豆、その後方に茎レタスが育っている。左手にはジャガイモ、そのさらに左には茄子とスイカがある。

植え付けた作物はジャガイモ、大豆、ナス、茎レタス（中国野菜）、大根、スイカ、サツマイモである（【図1】）。文献講読といった他のゼミ活動の合間に行ったため、ゼミ活動としてゼミ生全員で活動することは、月に一度程度であった。さらに天候にも左右されるため、農作業体験の活動は頻繁に行うことができなかった。

またゼミ活動とは別に、曜日毎に水やり当番を2名組み、水やりと草刈りをすることにした。畑の周辺に水路はあるが、こちらに取水権がない。そのため学内でポリタンクに取水し、車で畑に運んで水やりを行う流れにした。2名とした

のは、二つの理由がある。第一に車を使う必要があるため、第二に水が重いので二人で協力することをねらいとしたためである。こうして、水やりと草刈りを通じて、作物の育成具合を確認し、栽培に主体的に関わることをねらいとした。

塩田平では5月半ばまで霜が降りることがあり、4月に露地植えをしたサツマイモやジャガイモの芽は、一晩霜が降りただけで全て枯れた。しかし、寒冷紗を張った大豆の畝には害はなかった。寒暖の差が激しい盆地では、寒冷紗が有効であることを体的に学んだ。

水やり当番は、雨天時にはしなくてよいと学生たちに伝えたが、自分たちでは判断できずに教員に聞いてくる学生がいた。そのため、水やり中止の判断基準を共有することが必要であると感じた。

#### 第4節 収穫

前期中に収穫の時期を迎えたのは、ジャガイモのみであった。ジャガイモの収穫前の3日間ほどが晴天だと、収穫時に乾燥しているために芋が湿らずに腐りにくいという。しかし今年は天候不順のため、なかなか収穫のタイミングが合わなかった。結局ジャガイモの収穫が学期末に

まで間に合わず、期末試験後となった。そのため、学生たちの予定が合わず、収穫に参加したのは2名に留まった【図2】。収穫時には、食中毒の原因となる緑化したジャガイモを取り除いたが、それでも籠2つほどの収穫となった。

もともと学期最後のゼミで調理実習を予定し、そこで収穫した作物を調理するつもりだったが、それには間に合わなかったのが残念であった。収穫したジャガイモは、ゼミ生に分配した。なお、調理実習では他ゼミと合同で行い、ピザの作成と流しそうめんを行った。

図2 ジャガイモの収穫



左：収穫時に土が湿っていたため、芋を掘り起こすのが難しかった。

右：収穫したジャガイモは、籠二つほどであった。土寄せをしていなかったために緑化した芋は取り除いている。

## おわりに

本稿の執筆意図は、ゼミナールで行っている農作業体験を実践報告としてまとめることで、学生にとって何を学んだか、さらには何を学び途中であるのか、我々の実践の意味は何か、捉え返すことであった。特に困難を感じたのが、学生の主体性をどのように喚起し、総合的な学びをどう促すか、という点であった。ゼミ活動時間内にゼミ生全員で農作業体験を行う機会は月に一度程度であり、積極的に活動に取り組む学生もいれば、なかなか積極的に参加しない学生もいた。そこで、学生同士で教え合い、学び合うように促した。そのことがどの程度功を奏したのか、まだ分からない。

実際のところ、ゼミ活動以外の実習園の手入れは基本的に報告者が行っている。特に夏休みには学生が学内にいないため、収穫や手入れは報告者が行っている。そのため、報告者が行っている家庭菜園に学生が動員される、と学生が捉えているのではないかと危惧している。こうした中で、学生の主体性を促すことは果たして可能なのか。今後も農作業体験を通じて、この課題に取り組んでいきたい。

(山本一生)

## 注

- <sup>1</sup> 田中千賀子『近代日本における学校園の成立と展開』（風間書房、2015年）p. 271。
- <sup>2</sup> 田中前掲書、p. 83。
- <sup>3</sup> 『長野県教育史 第6巻（教育課程編3）』（長野県教育史刊行会、1976年）pp. 870-871。
- <sup>4</sup> 1913年7月長野県令第27号「小学校令及小学校令施行規則実施ニ関スル規程」改正『長野県教育史 史料編八 第14巻』（長野県教育史刊行会、1979年）p. 15。